

冷たさが頬に刺さる。月が変わってから急に冷え込むようになった。

深く息を吸い込んで吐き出してみたが、白くは濁らない。この程度の寒さなどまだ序の口、と嘲笑われたような気分になる。故郷の冬の方がずっと寒いと言うのに、体はすっかり東京に馴染んでしまった。

ギルベルトはじつと地面を見下ろした。

丁寧に掃き清められた店先には、この季節に紅葉の一枚も落ちていない。塵芥の一切無いきつぱりとしたその地面は、この店の主人の心を現わしているかのようにだ。

小料理屋、菊。

ギルベルトの下宿先から、二十分と少しばかりメトロを乗り継いだ場所に店はある。家庭教師アルバイト先が丁度この駅近くで、店には週に一度通っていた。

じやり、とギルベルトの靴が地面と擦れた時、店の中から控えめに声が聞こえてきた。

「ギルベルト君でしょう、どうぞお入りください」
低くて柔らかい声は、それだけで人の気持ちを持穩やかにさせる。

ギルベルトは目を閉じて息を吐き出すと、店の戸に手を掛けた。

店内に入ると、ギルベルトを暖かさが包み込んだ。寒さに縮まっていた四肢が弛緩して頬が緩む。店内には間接照明の優しい橙が満ちて、ギルベルトは目を細めた。

「いらつしやい」

カウンターの向こう側からは柔和な笑みを浮かべた人物がギルベルトを迎え入れてくれる。彼の醸し出す空気は、故郷の家を思わせる。思わず口をついて出そうになった「ただいま」を飲み込み、ギルベルトは軽く片手を上げてカウンターに座った。

差し出されたおしぼりは暖かく、冷え切った指先をじわりと温めていく。

店には一組客が入っており、テーブル席に座っている。彼等の皿の上には魚の揚げ物にスライスされた玉葱らしきものがのっている。途端にギルベルトの腹がぎゅると音を立てた。

「同じものをお出ししましょうか」

カウンターの中から小首を傾げてギルベルトに尋ねる。決して押しつけがましくない響きの声だ。